

平成 26 年度

小中の接続を図るための実践記録
～研究開発学校 2 年次の取組～

北海道教育大学附属札幌小学校
北海道教育大学附属函館小学校
北海道教育大学附属旭川小学校
北海道教育大学附属釧路小学校
北海道教育大学附属札幌中学校
北海道教育大学附属函館中学校
北海道教育大学附属旭川中学校
北海道教育大学附属釧路中学校

北海道教育大学

平成 26 年度

「小中の接続を図るための実践記録～研究開発学校 2 年次の取組～」

目次

1. 研究開発学校における小学校新カリキュラムの実践・・・・・・・・・・1

伊藤 光 (北海道教育大学附属函館小学校)
佐々木 歩 (北海道教育大学附属札幌小学校)
岸田 直文 (北海道教育大学附属旭川小学校)
津田 裕匡 (北海道教育大学附属釧路小学校)

2. 9年間を見通した CAN-DO リストの作成と
スパイラルタイムの実践・・・・・・・・・・19

小野 祥康 (北海道教育大学附属旭川中学校)
山口 修司 (北海道教育大学附属札幌中学校)
平石 暁史 (北海道教育大学附属函館中学校)
吉岡康一郎 (北海道教育大学附属釧路中学校)

研究開発学校における小学校新カリキュラムの実践

伊藤 光（北海道教育大学附属函館小学校）

佐々木 歩（北海道教育大学附属札幌小学校）

岸田 直文（北海道教育大学附属旭川小学校）

津田 裕匡（北海道教育大学附属釧路小学校）

はじめに

北海道教育大学附属札幌小学校外7校では、平成25年度より研究開発学校の指定を受けている。昨年度各附属小学校においては、4附属小学校共通カリキュラムの原案を基にした各種実践を行い、カリキュラム作成に向けて成果と課題を探っている。

平成26年度は、文部科学省研究開発学校研究協議会において賜った指導助言により修正した「平成26年度研究開発実施計画書」の内容に沿う形で、現在作成中の新カリキュラムの内容に基づく実践に各小学校で共通して取り組んだ。今年度は新カリキュラムへ移行していくための期間と位置付けており、低学年においては作成中の新カリキュラムに基づく実践を、中・高学年においては新カリキュラムの内容を一部取り入れた移行措置を取りながら実践を行っている。

さて、旭川小学校の児童の学習の振り返りで、次のような記述が見られた。

- 初めはほんの少ししか分からなかったけれど、少しずつ覚えられて楽しくなってきた。(1年)
- リズムに合わせて英語を覚えられて楽しかった。(1年)
- シェーン先生(ALT)と一緒に楽しく勉強ができた。もっと勉強して英語が話せるようになりたい。(1年)
- 実際の場面を想定して、その場面に合った態度で会話ができたのでよかったです。(6年)
- いつもより場面に合わせた丁寧な表現を使うことができました。英語で価格交渉などの会話をすることができました。(6年)

このように、子どもが学びの成果を実感することができるようにしながらコミュニケーション能力の基礎を養っていくためには、どのようなカリキュラムを編成し、どのような授業をつくっていくとよいのか。今年度各附属小学校で検証した新カリキュラムの適切性や、教科の目標を達成できるようにするために取り入れた指導方法や教材等、カリキュラム実施の効果、そして実施上の問題点や今後の課題を報告する。

1. カリキュラムの適切性

現在、作成を進めている小学校英語科のカリキュラムは、低学年から英語に少しずつ触れていき、覚えた英語を繰り返し活用しながら学習を積み重ね、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成はもちろん、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を育むことを目指すものである。子どもの発達段階や知的好奇心の高まりに合わせて学習を進めていくことで目標を達成することができるよう、低・中・高学年それぞれの目標を定め、指導内容を設定している。

現在、検討を進めている小学校英語科の教科の目標と、各学年の目標は次の通りである。

(資料：小学校英語科の目標、各学年の目標)

これらの目標の文言についても精査を進めているところではあるが、差し当たって、これらの目標を達成できるようにするためのカリキュラムを、資料にあるように定めた。

(1) 低学年のカリキュラム

低学年では、歌やゲームに重点を置いた活動を通して、英語のリズムに慣れたり、主に身近なもの・ことを表す語彙や表現の技能を身に付けたりすることを目指す。身近なもの・ことを表す英語を多数聞いた話したりしながら意欲的に学習することができるよう、身近なもの・ことに関する様々な話題を単元として位置付け、生活経験や他教科における学習内容と関連を図った活動を各種設定している。

<算数科との関連を図った例>

例えば函館小では、1年生の単元「いくつあるかな？」において、1年生でも身近な英語表現になっている1～10までの数字を表す英語を扱った。また10より大きい数字を表す英語にも興味を抱いている子どもも多いので、今後の学習で活用できるようにすることも踏まえ、11と12についても取り上げた。この学習を行う時期は、算数科では足し算や引き算が導入される頃であり、子どもの興味・関心に合わせて、ものの数を単純に英語で数えるだけでなく、あわせていくつあるか数えるなどのゲーム性のある活動を設定するなど、算数科の学習内容との関連を図るようにした。

<生活経験や生活科と関連を図った例>

また同じく函館小で実践した2年生単元「好きなおやつをもらおう」においては、絵本『yummy YUCKY』の読み聞かせによる導入を行い、絵本に出てきた食べ物や普段食べているものの中からyummyなおやつを想起するよう促した。そしてyummyなおやつを集めるために、おやつを表す英語を使いながら交流する場を設けた。英語を使って会話することを楽しんだり、ほしいものを手に入れることができたという達成感を味わったりすることができるよう、例えばお店屋さんごっこを行ったり、お店でもらったおやつカードに色を塗って自分好みのおやつプレートを作るなど、生活科での学習経験を生かした活動を設定したり図画工作科との関連を図った学習を展開する場を設けたりした。

<生活科と関連を図った例>

生活科と関連を図った別の例として釧路小での実践がある。釧路小では、1年生の単元「むしとりをしよう」において、1年生の子どもたちが興味・関心を強く示すものとして、虫を表す英語を取り上げた。1年生は、入学してから、初めて見るものや、新しく知ることによって溢れている。子どもたちが休み時間遊んでいる校庭のそばにある森にいる虫や、生活科で捕まえた虫を取り上げることで、子どもたちにとって身近なものを表す英語に触れることができるようにした。

<生活経験と関連を図りながらゲーム性のある活動を設定した例>

札幌小でも、低学年の目標を達成することができるよう、数、色、体の部位、動物、身近な乗り物など、子どもの興味・関心や日常の中に登場しうる単語を多く取り入れて授業をつくっている。例えば1年生の単元「このやさい わかるかな？」においては、野菜の断面を見たり色などを表す英語をヒントとして聞いたりしながら何の野菜か推測するようなやり取りを楽しむことができるよう、簡単なクイズ形式の活動を設定した。楽しく活動できるように設定したゲーム性のある活動は、低学年の子どもたちが集中を持続し、興味・関心をもち続けながら取り組むために必要な要素であると考えた。

この実践では、単元で扱う単語の精選を図った。野菜を表す語彙は、身近ではあるものの、ものによっては子どもにとってなじみの薄いものもあるため、あれもこれも取り入れると過重負担となる可能性がある。そこで、外来語として使われている語や、英語ならではの言い方をする語をバランスよく取り入れていき、子どもにとって適度な難易度になるようにした。語彙数についても、子どもの実態を見ながら加

減していった。その際、単元で扱う語を2時間に分けて取り入れていった。こうした手立てによって、子どもが適度に難しさを感じながらも、単元の学習を通して全ての単語を理解し、発話につなげることができた。

<低学年カリキュラムのまとめ>

このように低学年では、数、色、体の部位、動物、虫、身近な乗り物、おやつなどの話題を設定し、それらを表したり、それらを使ってやり取りを楽しんだりするための単語を、一単元につき8~10語程度扱い、定着を図っていく。子ども一人一人の生活経験や学習経験を基に学習を展開することができるような話題を単元として設定することで、身近なもの・ことを表す英語を多数聞いたり話したりしながら英語の音声に少しずつ触れていくことができるようにしている。それとともに、「これを英語で言うことができる」という自信を高め、「これはどう言うのだろう」といったような「もっと学びたい」気持ちを引き出すことをねらったカリキュラムとすることが有効である。

(2) 中学年のカリキュラム

中学年では、友達や教師とのかかわりを重視したコミュニケーション活動に取り組み、低学年で触れてきた身近なものを表す英語も含めて、簡単な英語を使いながら、自分の好みや思いなどを聞いたり話したりすることができるようになることを目指している。また、アルファベットを識別したり、正しく書き写したりしながら、身近なことを表す英語を読んだり書いたりすることができるようにしていく。

<簡単な英語でやり取りする例>

例えば身近なものを表す英語を活用していく単元“*What's this?*”においては、実際に触ったり、簡単な英語やジェスチャーなどのヒントから類推するクイズ大会を設定した。その際、前学年までに聞いたり言ったりしたことのある英語については、極力思い出しながら使ったり、思い出せない場合は、友達や教師に教えてもらって使いながら覚えていくことを働きかけた。またヒントを求めるための簡単な英語として“*Hints, please.*”や回答に対する反応として“*That's right.*”や“*Sorry, no.*”などを教え、それらを使いながら積極的にコミュニケーションを図ろうとしている様子が見られた。前学年までに触れてきた英語を使うことができる安心感が、新しい英語を覚えたり相手の様子に合わせて反応するための英語を選び出したりすることへの抵抗感を和らげることができた。

<自分の好みなどを伝える場面の設定例>

前述の学習経験を生かし、色や形など表す英語を扱う単元“*Which one is my T-shirt?*”においては、Tシャツの特徴をヒントとして伝えることで、自分のTシャツはどれなのか当ててもらおう活動を展開した。子どもにとって自分の好みというものは比較的発露しやすいものである。そこでTシャツには自分の好きなデザインや食べ物、動物などを描くようにした。このようにすることで、Tシャツの特徴を、“*Red and white*”など身近なことを表す英語で伝えるだけでなく、*I like cats.*など自分の好みを伝える英語で伝えることができるようにした。

またアルファベットそのものを扱う学習場面では、自分の大好きなものの絵を描き、それを表す英語を書き写したピクトフォリオの制作に取り組んだ。この学習を始める少し前に、国語科においてローマ字の学習に取り組んでおり、それに合わせて学習活動を設定したのである。英語だけでなく日本語もアルファベットで表すことができることに気付いていた子どもたちは、アルファベットを使って表してみたいという思いや願いを一層強めているところであったので、たいへん意欲的に活動に取り組んでいた。

(3) 高学年のカリキュラム

高学年においては、初歩的な英語を聞いて話し手の意向の大体を理解できるようにしたり、初歩的な英語を用いて自分の思いや考え、事実などを話したりことができるようになることを目指している。また、これまでに学習してきた身近なことを表す英語や簡単な英語を声に出して読んだり、書き写したりしながら、文字を介してコミュニケーションを図ることができるようにする。なお、「初歩的な英語」の内容については、現行の中学校学習指導要領の外国語科の言語材料に示された語や文法事項などの範囲の英語も参考にしながら精査を進めている段階である。

様々な学習経験を積み重ねてきている高学年は、簡単な英語を使うゲーム性の強い活動だけでは飽き足らず、自分たちにとって興味・関心のある情報を求めたり、自分たちの知っていることを英語で紹介したりすることに挑戦したいという思いや願いを強めるようになる。そこで、高学年では事実情報について伝え合う活動を展開する単元を多く設定し、事実情報に関してやり取りをしつつ自分の思いや考えなども伝え合うことができるようにしている。

例えば函館小の5年生では、宝物が隠されている場所のヒントが英語で書かれたカードを読みながら行う宝探しを行った。これは4年生で設定している単元「どこにありますか？」が元になっており、“Where is the treasure?” – “It’s on Hikaru’s desk.”などの英語を聞いたり話したりしながら行う活動を展開するのだが、5年生ではこれに色や形を表す英語を「読むこと」も取り入れ、さらにいくつか集めた情報を整理することで初めて宝物の場所がわかるようにした。前学年までに覚えてきた英語を使って事実情報を聞いたり話したりすることに加え、読んだ英語の内容を基に推測するやや高度な活動であったが、学習してきた英語を活用できることや、レベルアップした内容に挑戦できたことに満足感を覚える子どもが多かった。

同じく5年生単元で、「自分の町を紹介しながら附属小の友達と交流しよう」がある。これも、子どもたちが今住んでいる町の観光名所や名物など自慢できる事実情報を紹介する活動を行う単元である。子どもたちは自分たちの町について知っていることをウェビング・マップに書き出しながら伝える内容を決めだし、伝えるための英語を想起したり新たに覚えたりしながら意欲的に学習に取り組んでいる。(現在学習が進行中の単元である)



また現在の函館小の6年生で事実情報を伝え合う単元としては、「中学生の一日の生活についてインタビューしよう」という単元を設定した。これは進学を控えた6年生が、自分たちの今の生活とインタビューによりわかる中学生の生活の傾向を比較し、進学に備えて見直した冬休み中の日課表を英語で書き表すために役立てるというものである。自分たちにとって実感がまだない中学生の生活について知ることができる絶好の機会ということから、子どもたちは積極的に中学生に英語でインタビューし、中学生が教えてくれる一日の生活の内容に耳を傾けていた。



(この単元は、新カリキュラムへ移行していくために、今年度の函館小の6年生用に設定した単元である。新カリキュラムでは、一日の生活や自分の日課に関わる単元は5年生で設定している)

このように高学年では、学年発達と興味・関心に合わせて事実情報について英語で伝え合う活動を展開する単元を低・中学年より多く設定している。

なお、旭川小学校の高学年のみ、検証のために英語の時間を年間70時間ずつ設定している。他の附属学校より多く設定している35時間分を利用し、5年生では様々な人とのかかわりを重視したコミュニケーション活動に取り組み、表現の技能を身に付けることを目指している。6年生では旭川小学校独自のカリキュラムを作成しており、5年生までに学習してきた基礎の上に、定着を図るための時間を取り、タスクで使用しながら技能を習得していく活動を設定した。また、実際のコミュニケーション場面で言葉を使用できるようにするために、語彙や表現を増やすことにしている。

(4) 既習の言語材料を活用するスパイラルな学びを目指して

中学年以降のカリキュラムでは、低学年で触れた語彙を活用することができるよう、低学年で扱ったカテゴリの語も取り入れ、段階的に、スパイラルに学んでいくことができるようにした。

わかりやすい例をあげると、数についての語彙である。低学年ではone~tenの単語を学習したが、これらは、ほとんどの子どもが見聞きしたことがあると答えており、子どもにとっての難易度は非常に低く感じられていたと考えられる。しかし、はっきりとした発音で声に出したり、音声を聞いてすぐに数を認識したりすることは難しいようであった。そこでカウントアップ、カウントダウンなどを行う場を作ったり、ゲームを取り入れたりすることで、繰り返し声に出して数えながら数のイメージと言葉をつなげていった。中学年ではさらに、eleven~twentyや、それ以上の大きさを表す数の言い方を学ぶ。数についての抽象的な概念が育っているため、語の組み合わせによって数を表現することを理解しやすく、より知的な活動が求められる。そして高学年では数に関する語彙を基数に留めず、序数も取り入れて、月、時刻など、日常でもよく用いられる汎用性の高い表現を取り入れていく。数の表現は、既習事項をヒントとして語彙を広げやすいカテゴリでもある。前提となる表現が前学年までに繰り返し用いられながら習得されることによって、学習の難易度を低めたり、新しい気付きにつなげたりすることができる。

各学年での学習では、前学年までの表現を導入に取り入れ、既習を想起させながら進めていく。学年をまたいで繰り返し学習し、学びを積み上げられるようにしている。

2. 取り入れた指導方法、教材、ICT機器等

各小学校で新カリキュラムの実践を行うための指導方法や教材等については、代表的な実践例を取り上げていくと次のように整理することができた。

- (1) 学習への一層の動機づけを図る活動の設定
- (2) ゲーム性のある各種活動の設定

(3) コミュニケーションを支える技能を身に付けるための指導

(4) 学習への一層の動機づけを図る教材の用意

(1) 学習への一層の動機づけを図る活動構成

子どもが自主的、主体的に、そして意欲的に学習活動を展開することができるようにするためには、学習への動機づけが欠かせない。特に、小学校英語科は母語ではない言語として英語をたくさん使う教科であることから、学習への一層の動機づけを図ることができるような活動を設定するよう工夫している。

<授業の導入>

例えば旭川小における授業の導入の場面である。指導者との挨拶や前時の学習の復習に取り組むことに加え、日常の生活や週末の出来事を尋ねるなど、意味中心のやり取り(例:What did you do last weekend?)をしている。授業の導入から、意味のあるコミュニケーションが図られる活動を設定しているのである。教科として中学校への円滑な接続を図る上でも大切な指導であると考えている。

<目的意識をもった活動の設定>

目的意識をもった活動を設定することも、子どもが意欲的に学習活動を展開していくことができるようにするための重要な手立ての一つである。



(「ふしょうのもり」写真)

これは、釧路小の1年生の活動の様子である。1年生は、入学してから初めて見るものや新しく知ること溢れている。そこで本実践では、児童が休み時間遊んでいる校庭のそばにある森(通称「ふしょうのもり」)にいる虫や、生活科で捕まえた虫を取り上げ、子どもたち自慢の遊び場である「ふしょうのもり」に、「どんな虫がいるの?」と問うことにより、ALTに伝えたいという思いを膨らませることができるようにした。自分にとって身近にあるもの、興味・関心のあるものを取り上げることで、また、ALTに伝えるという目的意識が生まれたことで意欲的になったのである。

<言いたくなる場面の設定 Paraphrasing の利用>

ALTに伝えたいという思いをもった子どもたちが、積極的に英語を使いながら伝えることができるような手立ても大切である。そこで、伝えたい虫そのものはALTに見えないようにしながら、その虫をALTに伝えようと提示した。(Rainbow Box という箱に入れて提示)



子どもたちは、それまでに学習した色や、動き（てんとう虫であれば、red, black, flying など）で表現できるように提示した。

虫をALTに伝えるという設定では、色や動作だけではなく、大きさや形を使って表そうとする児童がいた。また、それだけでは伝えきれないと感じた児童は、ジェスチャーで飛ぶ真似をしたり、指で大きさを表したりしていた。このようにして、なんとかしてALTに伝えようという目的意識や相手意識をもたせ、そのための場を設定することで、進んで伝えようとする姿が見られた。

<学んだ言葉を使った交流とその成果を実感できるようにするための場の設定>

英語を言いたくなる場面で目的意識をもって活動できるようにすると、子どもは意欲的になる。そして実際に友達と学んだ言葉を使ってコミュニケーションを体験し、その成果を実感できることで、子どもは一層学びへの意欲を強めていく。

例えば札幌小の実践では、子どもたちが学んだ野菜を表す英語を使って行う、野菜の好き嫌いを尋ね合う活動を設定した。食べ物の好き嫌いは、個人によって差が大きく出る。だからこそ、いろいろな答えを引き出しやすく、多くの友達と積極的に関わろうとする姿を期待できる。“Green pepper?”のように上がり調子の抑揚をつけて発音することで尋ねる意味合いをもたせ、英語の音を楽しみながら、繰り返し声に出すことができるようにした。

そして、友達に尋ねることができた成果をワークシートに表し交流させた。自分の活動を形に残すことによって、関わり方の傾向が見えるとともに、より多くの活動の様子を残そうとする意欲を高めることができる。本実践では、野菜のイラストの横に○や×を付けて聞き取った内容を記入していくことにした。「自分と同じものを食べられる人を探した」「全部の種類野菜を調べた」など、子ども自身が考えをもって友達と関わろうとしていた。また、印の箇所にはたずねた友達の名前を書く、自分と同じ人は印を変えるなど、記入の仕方を工夫して自分の活動の成果を残そうとする姿も見られた。

<学習の流れの提示と英語を活用する場の設定>

子どもの実態や単元の内容によっては、単元の導入時に例えばデモンストレーションビデオを観せることにより、目的意識や相手意識をもたせ、やってみたいという意欲を高めるとともに、何をどう学習していけばよいか提示することが効果的な場合もある。

釧路小の5年生で実践した単元「What's my favorite thing? ～お気に入りのものを紹介し合おう～」では、第1時に、文字クイズを取り入れながら、お気に入りのものと、その理由を紹介し合っているビデオを観たことで、子どもは学習の流れを見通し、目的意識や相手意識をもっていた。そして今まで学習した表現をどう活用するか考え、コミュニケーション活動を工夫しながら取り組む姿が見られた。

また学習した英語を活用できるようにする場の設定の類例として、旭川小の実践では、練習した表現を使えるようにするために、現実に近い場面設定をして、ペアやグループによるロールプレイやインタビュー等のタスクに取り組んでいる。

<インフォメーション・ギャップを埋め合う活動の設定>

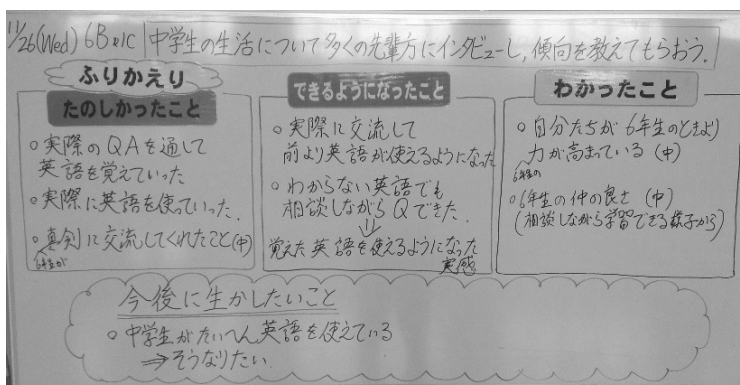
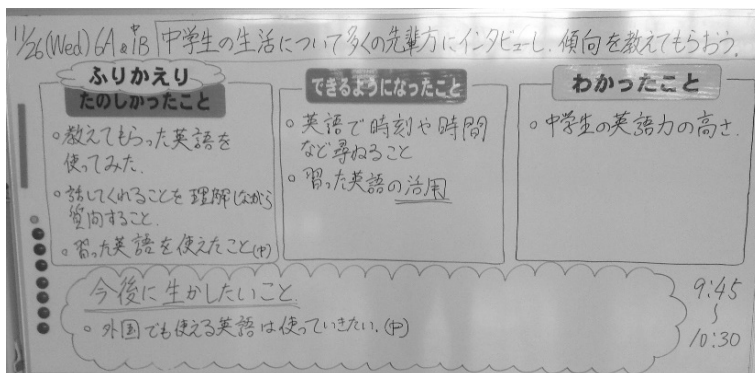
中学年から高学年にかけては、学習経験の積み重ねにより、聞いたり話したりしたことのある語彙や文が増えてくるのはもちろん、行ったことのある活動の種類も増えてくる。同じような活動を繰り返してばかりいては、子どもたちの知的好奇心を満足させることはできない。そこで、それまでの学習経験を生かしつつ、学習への一層の動機づけを図るために、インフォメーション・ギャップのある状況を設定し、それを埋め合う活動を取り入れた。それまでに覚えてきた英語を活用しながら、互いに必要な情報を伝え合うことで、課題を解決することができるようにした。（そもそもインフォメーション・ギャップのある状況

は積極的なコミュニケーションの条件として必須であるが、指導者がよりこのことを意識できるよう指導方法として取り上げたのである)



例えば5年生で行った単元「Where is the treasure?」では、活動に付加する強いゲーム性としてインフォメーション・ギャップのある状況を設定した。男子は女子が探している宝物の場所が英語で書かれているカードをもっており、その内容を女子に口頭で伝えるようにした。逆に女子は男子が探している宝物に関する情報をもっているようにした。子どもたちは男女とも互いに探している宝物を見つけ出すために、英語で積極的に情報交換を行っていた。

一方、現実のインフォメーション・ギャップを埋め合う活動も試みた。今年度の6年生で設定した単元「中学生の一日の生活についてインタビューしよう」では、中学生との合同学習を行う場を設定し、小学生の自分たちが知りたいと思っている中学生の生活について中学生に直接インタビューすることで、実際のインフォメーション・ギャップを埋め合うことができるようにした。



進学を控えている6年生が活動を行ったからこそ、中学生との積極的な交流になったと捉えている。

このように、高学年においては、学習経験や発達段階に応じた知的好奇心を満足させることができるよう、インフォメーション・ギャップの埋め合いの場を意識的に設定するようにした。

(2) ゲーム性のある各種活動の設定

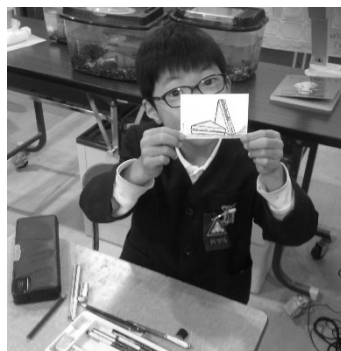
<ゲーム性のある活動の設定とそのねらい>

英語そのものへの興味・関心を喚起し、英語に慣れたり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりすることができるよう、低学年から中学年にかけての学習活動としてシンプルなゲームを各種設定することが多くある。ビンゴゲームや神経衰弱の類の活動は英語の音声に慣れる際のシンプルなゲームの代表例だが、これらは子どもたちの日頃の遊びの経験に支えられているので、学習のねらいに合わせて取り入れることで子どもたちが意欲的に活動を展開しながら学んでいくことができるものといえる。

これらの他に、例えば函館小の実践では、ものの数を数えたり計算をした結果を伝えたりする場合や、何の野菜・果物のことかヒントを基に類推する場合など、事実情報のやり取りを行う場合にはクイズ形式の活動を主に取り入れている。クイズの答えを探るために、事実に関して積極的に尋ねたり答えたりするからである。クイズは多くの子どものにとってワクワクするものであり、学習内容に合わせて取り入れることで自然と積極的なやり取りが生まれる。



また同じく函館小での実践例だが、自分の好みや欲しいものを伝え合う場合には、ミニ絵カードを用いたショップ型の活動（いわゆるお店屋さんごっこ）を取り入れることが多い。ショップ型の活動にすることで、好みや要求を伝え合うことが容易な環境になるからである。また好きなものや欲しいものを表現する場合には、好きなもののミニ絵カードをショップで手に入れ、それを切ったり貼ったりしてオリジナルの絵カードを作り、できあがった絵カードを見せながら英語で好きなものを話す活動も取り入れている。例えば、おやつ時間に食べたいものがチョコレートとクッキーだったとしたら、お店屋さん役の友達のところに行って、“(A) chocolate and (a) cookie, please.”などと話しながらチョコレートとクッキーのミニ絵カードを手に入れ、お皿が描かれた台紙に貼りつけ、それを見せながら“(A) chocolate and (a) cookie. Yummy!”などと自分の思いを述べるようにしている。ショップ型の活動も日頃の生活経験や他教科での学習経験が生きるものなので、効果的に取り入れることで子どもたちの活動も意欲的になりやすい。



このようにゲーム性が付加された活動やごっこ遊びの要素を取り入れることで、おもしろそう・やってみたいという思いをもって活動に取り組む中で、英語そのものへの興味・関心を喚起し、英語に慣れたり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりすることができるようにした。

<英語の音声と対象のイメージとのリンク>

またゲームやクイズは、英語を聞いてイメージ化することができるようにするための手立てにもなっている。例えば札幌小では1年生の単元「このやさい わかるかな？」において、野菜の断面図を提示しながら何の野菜かを当てていくクイズを取り入れたが、このクイズでは野菜の絵を見ながら日本語で野菜を当て、その後英語での言い方を確かめていった。そして、クイズに登場した野菜を絵カードで再確認し、ゲームの中で繰り返し使用していった。低学年においては、英単語のもつ意味をイメージで捉えさせていきたいと考えている。新しい単語を学ぶ際にも、英語の音声とともに絵カードや具体物を提示し、音声と対象をつなげていくのである。本実践でも、日本語訳を言うのではなく、絵を提示しながら英語の音声を聞かせていった。こうした手立てにより、ダイレクトに英語の音とイメージがつながり、絵や写真を見てすぐに eggplant や potato という言葉が出てくるなど、言葉に対する反応が速くなった。

釧路小においても、英語の音声と対象のイメージとがリンクされるよう、より自然な発音の音声をたくさん聞かせたり、自然と発話させたりすることが大切であると考え、ゲーム性を付加した次のような活動を設定し、実践した。

- 並べ替えゲーム：複数の虫のイラストを、ALT の発話を聞いてホワイトボードに並べ替える活動
- チャンツ：出てきた虫の名前を繰り返しながら、虫の動作を付けて発話する活動
- 虫取りミッシングゲーム：教室のいろいろな場所に掲示した虫のイラストを覚え、目をつぶっている間に ALT が虫取り網で隠した虫を当てるゲーム



これらは、コミュニケーションを支える技能を身に付けることができるようにするための指導にもなっている。

一方で、英語はある程度の練習を積み重ねることで、自信をもって英語を話すことができるようになる側面もあると認識している。例えば旭川小学校では、必要に応じて ICT 機器を使いながら英語をリピートして練習をする場も設けている。単純ではあるが、欠かすことのできない活動であると考えている。

(3) コミュニケーションを支える技能を身に付けるための指導

<英語の音声と対象のイメージとのリンク>

相手とコミュニケーションを図るためには、使われる英語とその意味内容を理解したり、理解した上で表現したりすることができなければならない。したがって、コミュニケーションを支える技能として、英語を聞いたり見たりして対象をイメージできる必要がある。低学年から中学年にかけては、先に述べたようなゲーム性のある活動を通して、子どもたちは少しずつ英語の音声と対象のイメージをリンクさせていくと考えている。

<英語の音声と文字とのリンク>

高学年になるにつれて、英語を読んだり書いたりしてみたいという思いや願いも強くなっていく。しかし日本語と大きく異なる英語の性質上、読んだり書いたりすることは、音声を聞いたり真似して言ったりすること以上に難しい。そういった難しさの一方で、文字を介したコミュニケーションは実際に行われており、それを支える技能も少しずつ身に付けていくことができるようにする必要がある。

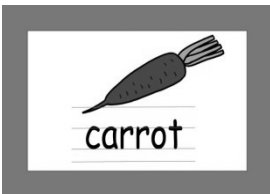
例えば旭川小では、フォニックスの取組を行っている。これは子どもが未知の単語に出会っても、フォニックスの知識（発音と綴りの関係）を活用して「読んでみよう」という意欲を育むために取り組んでいる。フォニックスに取り組むわかりやすい最終目標として、英語の絵本を一人で読めるようにすることを定めている。文章が読めるようになると、一層主体的に学習を進めるようになり、英語の力が大きく伸びると考えている。

例：アルファベット単音→3 レターワード (pen) →4 レターワード (milk) →ch, sh, wh, th→絵本（文章，ストーリー）を読む

しかし、子ども一人一人の英語の力の差はどうしても生じるものである。そこで旭川小では、iPadを活用した個別学習に取り組む実践も行っている。子どものレベルに合わせて、単語や表現の練習ができるようにシステムを構築している。また、アクティブボードや電子黒板も積極的に活用している。個別学習、一斉学習、協同学習のどの学習においても、ICTの活用は有効である。

<文字への意識づけを図る課題・環境設定>

釧路小の5年生で実践した単元「“What’s my favorite thing?” ～お気に入りのものを紹介し合おう～」では、今までに学習した表現を活用することができるよう、文字入りの絵カードを用意した。お気に入りのものを選ぶ時に扱った絵カード（下写真）は、108枚(108種類)作成し、すべて、『Hi, friends!』で出てきたものにした。再度提示することで、新しい表現とともに活用する場面が生まれると考えたのである。



一度音声から入った単語を、あらためて絵と文字とを一緒に提示することにより、今まで学習したことを想起したり、文字を読もうとしたり、書き写そうとしたりする意識が生まれた。

この時期の子どもは、聞くこと、話すことに興味をもちながら、文字を読んだり書いたりすることにも興味をもち始めている。耳から入った音声を文字にしてみたいと思ったり、目に入る文字や単語を読みたいと感じたりしているのである。今までも新しい表現には、イラストとともに文字を入れてきたが、今回は一度聞いたことのある単語に関する絵と文字と一緒に提示しました。さらに、文字の背景には4線を入れ、書き写したいと思った時の手助けになるようにした。

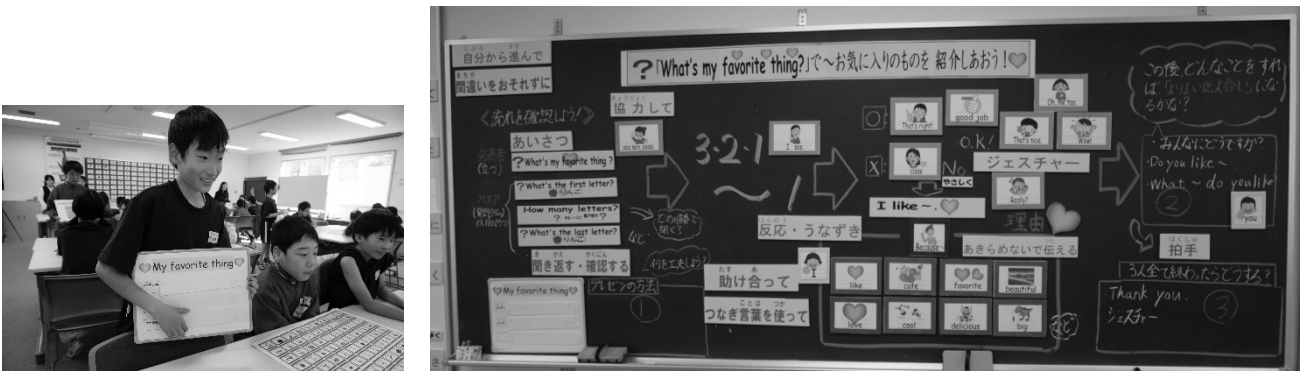
このようにしたことで、子どもたちは活動の中で、文字の位置、大きさにも注目するようになっていった。またその中から、お気に入りのものを選ぶ、相手のお気に入りのものを当てる際に、文字をヒントに紹介し合う活動（“What’s the first letter?” “How many letters?”などの英語でやり取りを行う）を取り入れることにより、文字や単語に自然と慣れ親しみ、文字への意識づけが高まっていった。子どもは、自然に何度もそのアルファベットや単語を読もうと試みることにより、アルファベットが数個集まったものが単語で、意味を表すことになる自然と気付いていた。

<学習の積み重ねや言葉への気付きを促す環境の設営>

子どもが学習する単語や表現は、どんどん積み重なっていく。学習した言葉を活用したり振り返ったりしながら、コミュニケーションを図るための方略やマナーに関する気付きや、単語の種類や役割などへの気付きを促す手立てとしての環境設営も大切にしている。

例えば釧路小学校では、コミュニケーションのマナーやつなぎ言葉を「コミュニケーションの木」として掲示し、日常的に子どもが目にするようにしている。また、学習した単語や表現は絵カードにし、その単語の種類によって色分けし、かつ動かすことのできるボードを作っている。

それらのカードが子どもの目に入る場所にあることで、何気なく目にしたり、大切なことを再確認したりするきっかけとなり、それを視覚的に授業の中で取り上げることにより、カードの並びから語順について気が付いたり、カードの色の違いから疑問詞に注目したり、品詞の順番や語の入れ替えに着目する姿が期待される。



(4) 学習への一層の動機づけを図る教材や ICT 機器等の用意

学習への動機づけを図るためには、これまでに述べたような活動の設定、直接的な指導、環境構成などの他に、魅力ある教材等も必要である。

<話題の提示と自分の好みの想起を促す各種絵本>

主に低学年から中学年において、子どもたちの新しい学習内容への興味・関心を喚起したり、英語の音声に慣れることができるようにするための手立てとして、魅力ある英語の絵本の読み聞かせを行ったり、英語の歌を取り入れたりしている。

例えば函館小では、2年生で設定している単元「ハロウィーンのお面をつくろう」で絵本『Boo Who?』の読み聞かせを行った。この絵本には、ハロウィーンでおなじみのキャラクターが順番に登場するので、読み聞かせをしながら見せていくことで、子どもたちは自然とそれらのキャラクターを英語で言っていく。子どものハロウィーンへの興味を喚起することのできる教材の代表例であるといえる。

同じく2年生で設定している単元「好きなおやつをもらおう」では、絵本『yummy YUCKY』を活用した。絵本に登場する様々な食べ物を見せ、絵本に出てきた食べ物やそれら以外の食べ物で好きなものを想起するよう促したところ、子どもたちは次々と発表を始めた。絵本の読み聞かせにより、英語の音声とともに視覚的に興味・関心のある情報が入ってくることで、子どもたちの学習への動機づけを図ることができた。

また札幌小では、1学年の単元「このやさしい わかるかな?」において、日本語の幼児向け絵本『やさしいのおなか』を導入に活用した。野菜の断面図を提示しながら何の野菜かを当てていくクイズを取り入れ、クイズを解いていく中で野菜の単語に出会っていくようにした。英語の絵本を取り入れた導入は、これまでも低学年から中学年でやってきた。英語の絵本を、単元を通して読み、何となく意味を掴んだり、文字と読みの関連に気付かせたりしてきたが、本単元での絵本の扱いは、それらとは異なっている。「何の野菜

かを当てる」という、日本語でも楽しめそうな活動を英語で行うことによって、子どもの興味・関心を引き出し、積極的に英語で言ってみようという動機づけを行うことができたのである。

＜遠隔地の友達との交流や情報蓄積・共有を可能にする ICT 機器や専用ホームページの活用＞

学習への動機づけが図られることで、子どもはより自主的・主体的に学習を展開し、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする。低学年から中学年にかけては、触れたことのある英語を活用しながら、同じ学級・学年の仲間とコミュニケーションを図ることに楽しさを覚える子どもが多い。しかし学年が上がり学習が進むと、コミュニケーションを図る対象として、同じ学級・学年だけでなく、違う学年や、学習内容によっては学校の仲間以外の人にも関心を向ける。

そこで、自分の学校にしながらこれを可能とするための手立てとして、北海道教育大学と附属小中学校では、学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」を用意している。これは子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲をもたせ、他者との協同学習による学びの広がりを実感させ、英語学習への動機づけと異文化理解を促す契機となるようにしたものである。このために専用サーバーを設置し、そこへデータをアップロードできるようにしている。

例えば釧路小では、5年生で設定した単元「What's my favorite thing? ～お気に入りのものを紹介しよう～」において、単元の終末に自分のお気に入りのものを表すピクトフォリオを制作し、専用ホームページにアップロードして、他附属の友達や先輩に発信しようという学習に取り組んだ。多数の相手に見てもらおうことを意識すると、文字の正しさに目が行くので、目的をもって正確に書こうとする様子がみられた。（下の絵は児童の作品）



elephant



crane



hamster

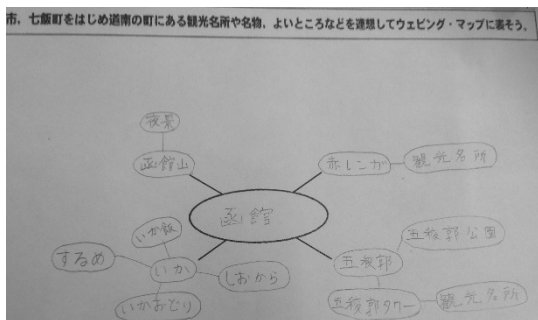


cherry



pumpkin

また、函館小では、ICT 機器やネットワーク環境を活用できる単元として、5年生で設定している単元「自分の町を紹介しながら附属小の友達と交流しよう」の実践を行っている。道南にある町について紹介するために、紹介の様子を動画で収録し、それをアップロードすることで、ネットワーク上で見られるように進めている。そして、それに対するコメントを投稿してもらったり他校の子どもたちによる他地域の紹介をアップロードしてもらったりするなど、ネットワークを介した積極的な協同学習となった。



You can see _____
 You can eat _____
 You can ride _____
 It's famous for apples _____

 In spring, 春には
 In summer, 夏には
 In fall, 秋には
 In winter, 冬には
 hamburger

以上のように、新カリキュラムの実践では、子どもの学習への動機づけを図りつつ、コミュニケーション能力の基礎を養っていくための指導方法や教材等の充実に努めている。

3. 実施による効果

(1) 実際のコミュニケーション場面を意識した言語の使用

6年生においては、5年生までに学習してきた語彙や表現を活用しながら、実際のコミュニケーション場面を意識して英語を使うことができるようになった。例えば以下は旭川小の児童の振り返り内容である。

- ・いつもより場面に合わせた丁寧な表現を使うことができました。英語で価格交渉などの会話をすることができました。(6年)
- ・実際の場面を想定して、その場面に合った態度で会話ができたのでよかったです。(6年)

このように、形式的なやり取りに終始するのではなく、実際のコミュニケーションの場面を想定することで、英語で話すためにはどうしたらよいかを考えながら会話する児童の姿が見られた。

(2) コミュニケーションを支える技能の習得

英語によるコミュニケーションを成立させるには、それを支える技能が身に付いていなければならない。児童は、ねらいを達成するためのコミュニケーションに必要な語彙や表現を覚え、繰り返し練習することで、自信をもって会話することができるようになった。また、技能に関する目標に対して自己評価をすることによって、児童自身が英語を覚えていっていることを実感している様子や、それらを使いながら行う次の学習への意欲の高まりが見られた。

- ・買い物に関する表現を身に付けることができました。今日の目標は達成できたと思います。次の学習でも頑張りたいです。(4年)
- ・今日はしっかりと「shopkeeper」の表現を身に付けることができました。今日覚えた表現を実際の場面で使いたいと思います。(4年)
- ・つぎは、くりすせんせいとえいごでおはなししたい。(1年)

また、H26 計画書にある通り、英語は繰り返し口にしながら自然と慣れていくことが大切である。したがって特に低学年においては、英単語のもつ意味をイメージで直接捉えさせていきたい。新しい単語を学ぶ際にも、英語の音声とともにピクチャーカードや具体物を表示し、音声と対象のイメージをつなげていく。新しい単語を提示する際にも、日本語訳を言うのではなく、絵を表示しながら英語の音声を聞かせていくようにした。こうした手立てにより、ダイレクトに英語の音声と対象のイメージがつながり、絵や写真を見てすぐに eggplant や potato という言葉が出てくるなど、言葉に対する反応が速くなった。英語の音声と対象のイメージとのつながりは、発話の手助けになると考える。

(3) 発音と綴りの関係への慣れ

旭川小では高学年においてフォニックスの指導を試みている。日頃からフォニックスの指導を行っていく中で、イラストとともに文字を提示したり、会話の流れを文字(文章)で提示したりすることにより、自然な形で発音と綴りの関係に気付く児童の姿が見られた。そして発音と綴りの関係に慣れ、文字を手掛かりとして英語を覚えたり、会話したりすることができた。

- ・友達と英語で会話するときに、分からないところがあったので、英語を見ながら会話しました。正しい言葉を使って会話ができたのでよかったです。(6年)
- ・フォニックスを毎回やっているおかげで、発音がよくなってきたと思います。会話練習や交流に生かしていけるので、これからも一生懸命に取り組みたいと思います。

(4) 英語を知ることによる日本語への気付き

札幌小1学年の実践では、野菜の名前を扱った実践の中で、児童が英語の意味から日常の日本語に対する理解を深めることができた。

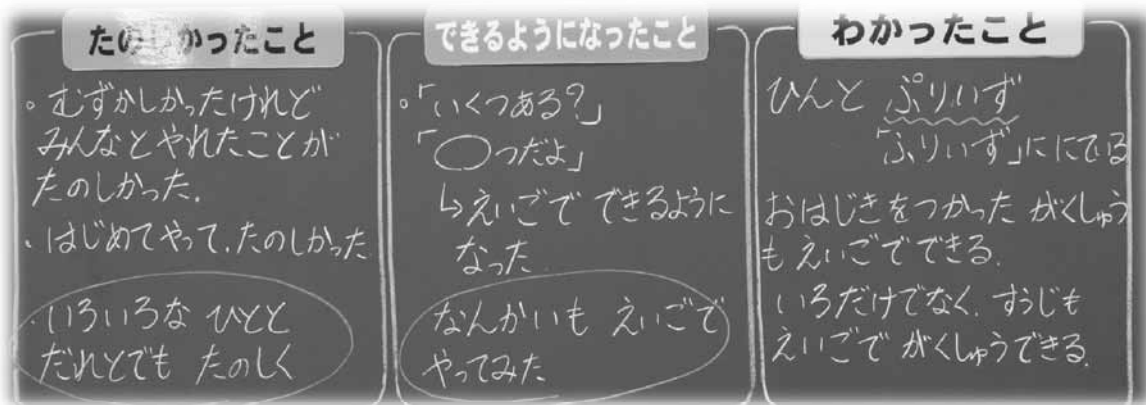
児童にとって、pumpkin や carrot といった語は既に日常生活の中で見聞きしていた子が多かったが、日本語での捉えが曖昧になっていた語もあった。onion の意味を授業の中で初めて知り、「そうか、オニオンスープは玉ねぎのスープのことだったのか。」というつぶやきが生まれた。

日常に入り込んでいる英語を、授業を通して再認識させることによって、身近な言葉について新たな気付きを生み出すことができる。それとともに、身の周りの言葉により興味・関心をもつことができるようになる。こうした日本語と英語の双方向の気付きは、低学年において特に顕著に表れている。

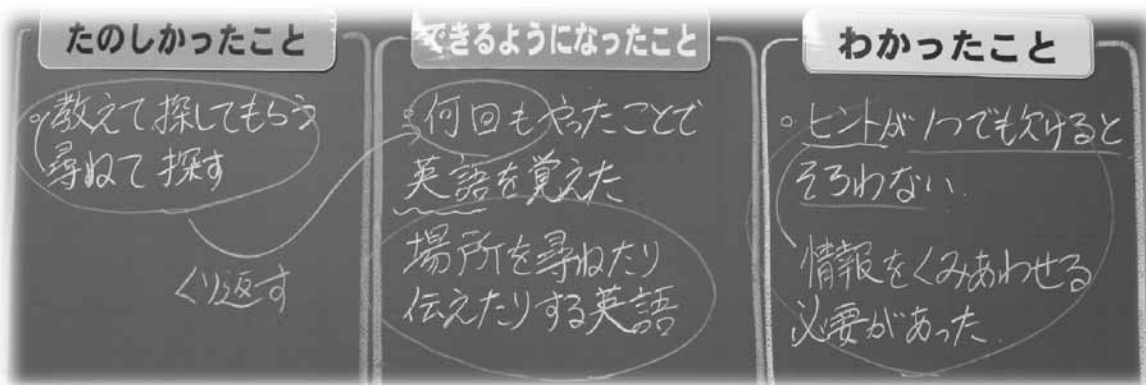
(5) 三つの観点をういた振り返りの質の高まり

函館小では、全学年が各時間の振り返りを「たのしかったこと（関心・意欲・態度）」「できるようになったこと（コミュニケーションを支える技能）」「わかったこと（言語や文化に関する気付きや知識・理解）」の観点で行っている。低学年と高学年の振り返りを比較すると、以下のような違いが見られた。

低学年



高学年



低学年では、言語そのものに対する技能の高まりや気付きが見られ、高学年では、コミュニケーション活動に対する工夫や気付きが書かれている。視点をそろえて振り返りを積み重ねていくことにより、より高次の学びを実感できたのである。

(6) 教師の意識の変化

教師間でも、実施による意識の変化が表れ始めている。今年度より全附属小学校全学年での学習が始ま

り、英語の授業作りに関する情報共有や相談を日常的に行えるようになってきている。加えて、あえて担任が授業の中で英語を使ってみることで、自身の変化を感じられるようにもなってきた。

「英語で人と関わる場があってこそ、大人である教師も自然と英語の言葉が出てくるようになった。」

(日本教育新聞 2014年11月10日付 札幌小学校記事より)

英語担当教員のみではなく、学校全体で小学校英語科の授業作りにも参画していくことで、視点をそろえて授業を見合うことが可能になりつつある。今後、教材の活用法や、クラスルームイングリッシュなども共有していきたい。

4. 実施上の問題点と今後の課題

(1) 実施上の問題点

小学校英語科の実践においては、すべての単元においてカリキュラム上の位置付けの明確化を図る必要がある。現在、カリキュラムについては精査を進め、言語の機能を軸としたカリキュラムが定まりつつある段階である。低学年については様々な「話題」を設定し、子どもにとって身近に感じる言語材料に多数触れることができるようなカリキュラムになりつつある。中学年においては身近なことを表す英語も含めて、比較的簡単な英語を用いて、好きなもの・ことや欲しいものなど自分の思いや考えを伝え合うことができるようなカリキュラムになりつつある。そして高学年においては様々な事実に関することを聞いたり、話したり、読んだり、書き写したりしながら伝え合うことを重視するカリキュラムに整いつつある。

学びの自覚化を促す取組については継続する必要があると考える。英語の学習を通して、自分は「どんなことが楽しかったのか」「どんなことができるようになったのか」「どんなことがわかったのか」など学習の価値を自ら見いだすことができるようにするのである。したがって、一単位時間の終末で、学習の成果やその理由を考え交流する場面を設けたり（交流内容は可視化し撮影・記録）、振り返りカードに具体的な内容を記入したりして、それらを蓄積していくことなどを継続していく方向で考えている。

自覚化を促す取組の一つとして、評価をどのように行い、児童に返していくのかということも今後さらなる検討が必要になる。今後は、英語の技能的側面にフォーカスを当てた自己評価シートのようなものを取り入れる可能性も探り、それにより子どもがどの程度自分の学びの伸びを実感できるのかを検証していきたい。

担任が中心になって進める英語の学習では、ネイティブにより近い音声をどのように子どもに与えていくかが課題になる。本年度から既に、各附属小においては、大学に協力いただき制作していただいているネイティブの音声を取り入れた視聴覚教材を使いながら授業を行っている。担任が中心となって進める授業においてネイティブの英語の音声を子どもに聞かせることができる教材としてたいへん役になっているが、より子どもの興味・関心や他教科での学びとの関連を図ることで子どもが意欲的に学習に取り組むことができるよう、その内容や扱う語彙・表現等については実践を重ねながら吟味を重ねていきたいところである。

また、教科として、高学年の指導をより専門的な知識をもった教員が指導していくべきであるとの考えもある。高学年の児童が、より高度な内容を伝えようとしたり、場面にふさわしい表現の仕方を確認したりする際などは、学級担任だけで対応することが難しいことがある。この点については現在のところ、函館小において小学校の免許とともに中学校外国語科（英語）の免許も所有している専科教員が全学年・学級の英語の指導を行いながら検証を進めているところであるが、そうした教育的ニーズに応えていく仕組みが求められている。

フォニックス指導を取り入れた旭川小では、上述のような成果がある一方で、子どもの具体的な姿から明らかになった課題として、英語が得意（好き）な児童と苦手（嫌い）な子どもの差が広がりつつあることが挙げられる。発音と綴りの関係を理解できている子どもは、耳と目、両方でのインプットがあるため、

早く覚えたり会話したりすることができる。一方、理解できない子どもは、英語を見ても読み方のヒントにはなりにくいため、表現の技能の習得にも時間が掛かってしまう。そして、自分は英語が話せないと感じている子どもにとっては、苦手意識を一層強くする結果を招いてしまうという悪循環が生まれる。苦手意識が広がりすぎないような方策を検討していく必要がある。英語が嫌いであったり、苦手であったりする子どもにも変容が見られるカリキュラムや指導方法を確立することも大切であると考えている。

(2) 今後の課題

現在、大学との連携を密にしながら、以下の資料等の整備を行っている。

- ・学習指導要領相当資料
- ・小学校卒業時の CAN-DO リスト
- ・各学年のカリキュラム
- ・学習指導案（単元計画）と教科書相当教材
- ・小学校英語科用各種教具

本来的には学習指導要領相当資料と小学校卒業時の CAN-DO リストがあった上で、各学年のカリキュラムが作成されていくところであるが、各校における実践報告を基に小学校英語科の目標を見いだしたりカリキュラムを構築したりしながら研究開発を進めている側面もあるので、各学年のカリキュラムにおいては年度内に内容の調整を済ませたいところである。

なお、上の 5 点については、実際にそれを用いて授業を行う附属小教員の意見も反映させながら作成・制作を進めている。作成・制作のためのやり取りは、大学サーバー上にあるメッセージボード（メンバー登録型の掲示板）や Dropbox（クラウドサーバーを利用するファイル共有用アプリ）、場合によっては大学・附属学校専用のテレビ会議システムを活用することで、遠隔地にいてもリアルタイムで行うようにしている。

児童間の個人差を埋めるための手立てとして、ICT の活用方法についても吟味が必要である。iPad 等を活用し、英語を聞いたり言ったり読んだりするための十分な練習時間を確保するなどの個別学習の充実を図りながら、同時に一斉学習、協働学習も効果的に行っていく必要がある。これらの成果は表れるまでに時間が掛かるため、長期的な視点からテストやアンケート等を実施することにより、成果と課題についてより詳細な検証を今後行っていく必要がある。

英語を使ったコミュニケーションへの動機づけとして、大学や各附属学校と連携を図っていく方法も考えられる。例えば第 5 学年や第 6 学年で設定している単元にあるように、道内附属学校同士の交流、大学との連携を通して、様々な人と関わり、英語で話してみたいという児童の願いを高めていくことは可能であると考えられる。

新カリキュラムを 4 附属小・中学校で実践していくと、各校の実態が反映され、結果として学ぶ語彙や学習した表現が異なっていくことも考えられる。そうした差をどの程度許容し、共有していくのかという課題もある。スノーマン・プロジェクトや交流授業を盛り込むなど、計画的かつ組織的に連携を進められるカリキュラムの改善を進めていきたい。

参考・引用文献

樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子（編著）（2013）『小学校英語教育法入門』研究社

木内勝（1997）『やさいのおなか』福音館書店

Leslie Patricelli（2003）“Yummy Yucky” CANDLEWICK PRESS

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂

直山木綿子（編著）（2011）『小学校外国語活動モデル事例集』教育研究開発所

萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生（編著）（2011）『小中連携 Q&A と実践』開隆堂

日本教育新聞平成 26 年 11 月 10 日付

9年間を見通した CAN-DO リストの作成とスパイラルタイムの実践

小野 祥康（北海道教育大学附属旭川中学校）

山口 修司（北海道教育大学附属札幌中学校）

平石 暁史（北海道教育大学附属函館中学校）

吉岡康一郎（北海道教育大学附属釧路中学校）

1. 中学校卒業時の目標設定と CAN-DO リストについて

研究開発学校として、教科としての小学校英語科の導入に伴い、小学校卒業時の学びの姿を CAN-DO リスト化することにより、中学校では小学校 6 年間を通して培われたコミュニケーション能力の基礎を十分に生かした効果的な指導内容と指導方法を検討できるようになると考える。

しかし、現在中学校では、小学校の英語科としての CAN-DO リストが作成中であることから、「Hi, friends!」に基づいた CAN-DO リストを作成し（資料 1）、それを用いて入学時の生徒の力（能力）を測り、その結果を踏まえた授業実践を積み重ねている。

また、小学校の英語科の卒業時の到達度を想定し、中学校では CAN-DO リストの作成も進めている。ただし、4 附属中では、それぞれの学校で使用している教科書の違いやカリキュラムの特殊性などがあることから、共通した生徒像を描くために、作成した CAN-DO リストを基に実践を行い、実際の生徒の姿を検証し随時更新をかけている（資料 2）。

2. スパイラルタイムについて

学習者の学びの一貫性を考えれば、小学校と中学校が指導内容の連続を図り指導方法に一貫性をもたせ、系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。そのためにも、まず、指導方法や内容を共有したり、協力して指導に当たるなどの教師間交流、児童生徒の学びの様子を通じて互いの学習内容を把握したり、児童生徒の言語習得への動機付けを図るための児童生徒間交流の在り方を研究することで、英語教育における小学校と中学校の円滑な接続を図ることが今、何よりも求められている。

そこで、中学校では、英語の時間の一部を小学校英語や高等学校との接続を目指した指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究している。具体的には、以下の①～④の内容を考えている。

- ① 小学校英語科のカリキュラムに基づき、学習内容の継続性を考慮した中学校における橋渡しの時間にできるよう、中学校 1 年生の最初の 5～6 時間を使ったオリエンテーションとしての活動
- ② 日常生活における意味のあるやりとりを中心としたコミュニケーション活動やコミュニケーション・ストラテジーの育成を狙った帯的な活動
- ③ 中学校終了段階で、討論やディベートなどの高等学校の学習内容を含めたコミュニケーションの機会をもたせるための発展的な内容の活動
- ④ 英語での自己紹介活動を小学生と交流したり、小学生へのビデオレターを作成したり、他地域の中学生や異文化をもつ人々と音声を中心として交流したりする等の活動

小学校との接続だけでなく、高等学校との接続も円滑にすることが大切である。高等学校の英語教育につなげるための文法指導、リーディング指導、ライティング指導、スピーチ・プレゼンテーション指導など、より高度なコミュニケーション能力を目指すための段階的指導についても、学校の英語教育の現状を調査把握しつつ、スパイラルタイムの中でどのようなことができるかを検証していく。

3. スパイラルタイムの実践例

3.1 帯時間的な活動の例

(1) 札幌中学校における実践

札幌中学校の第3学年では、授業の初めに帯学習として“CS(Communication Strategy) Training というパラフレーズ力を伸ばすウォームアップ活動を行っている。この活動は、小学校の共通カリキュラムにも組み込まれている方略的能力の育成を中学校で引き継ぎ発展させようとするものである。以下にその方法について示す。

【方法】

- ①二人一組でペアになる。
 - ②一人(A)が目を閉じ、もう一人(B)が黒板に書かれた答えを見る。
 - ③B生徒がA生徒に答えを英語で伝える。ただし、直接答えを言ってはいけない。
 - ④答えが分かったら、シートにその単語を英語で書き、正解ならばHi Five!
 - ⑤学級の仲間の説明から、その単語の説明文として最も適切なものを考え、シートに書く。
- (例) 答 cellphone⇒“It’s a small phone we can carry around.”

この活動の目的は、自分の知っている表現のみを使って、相手に英語で即応的に説明するという点にある。英語が苦手な日本人の姿として挙げられる例に、自分の言いたい単語を知らない場合、会話が止まってしまう場合がある。言いたい単語が出てこない場合というのは、母国語による会話の場合にも起こりうる。その時、私たちは様々な方法で会話を続けることを試みる。その中でも、簡単な言葉に言い替えるパラフレーズ(paraphrase)や近似表現(approximation)を使うことが多く、第二言語習得においては、このストラテジーが求められる。ペアの間にインフォメーションギャップを設定することで、「相手に伝えなければいけない」という必然性が生まれ、生徒のコミュニケーションへの意欲が促進される。

扱っている教科書の題材から、「世界中の子どもたちが描いた絵から見える、国の違いを伝えよう」という活動を行った。生徒は様々な国の絵から、自分が特に興味をもったものを選び、その絵から見える国の特徴や問題を伝えた。調べた内容を伝える際は、原稿は作成せず、キーワードとなる単語のみを書いた思考のマップと画像のみでスピーチを行わせた。聞き手は学級の仲間なので、伝える際には相手が理解できる表現で説明しなければならない。このとき、CS Trainingで培った能力を活かして、既習表現で説明するよう試みる姿が見られた。

また、特定の題材に関する意見交換を行う際にも、生徒が相手の意見に対して即応的に反論しようとしたとき、「この表現はどのように言えばよいのだろう」と生徒が考え、CS Trainingでの経験が活きてきた。中学三年間で学習する語彙数は約1200語。限られた知識を使って事実や自分の思いを相手に伝える能力が、今後の英語教育において重要である。



【国の違いを即時的に話す生徒の姿】

(2) 函館中学校における実践

函館中学校では、小学校と中学校の円滑な接続を目指すため、小学生との合同授業を行った(合同授業の実践の内容は後述する)。昨年度の実践では、小学5年と中学1年とが買い手と売り手に分かれ、買い物の場面を通して英語でコミュニケーションを図ることを体験的に学んだ。成果として、「小学生にとってはコミュニケーションを図る絶好の機会となった」とあり、「中学生にとつ

ても良い意味でプレッシャーを感じながら、コミュニケーションの方略を考え、より実践的な場面となった」ことがあげられた。一方で、「より積極的にコミュニケーションを図る工夫が求められる」という課題が残った。

そこで、今年度は、本校中学1年の英語科において、日常の授業の中で「ENJOY ENGLISH」という帯的な学習の時間を設定し、4月から継続的に、コミュニケーション能力を高める対話形式の活動を繰り返し取り入れて実践してきた。その活動の中で、生徒たちは2人組のペアや3人組のグループに分かれ、モデルに倣って対話のやりとりを練習後、クラス全体の前で発表しながら、より積極的にコミュニケーションを図るためのトレーニング的学習を行ってきた。

また、モデルの対話表現には会話のつなぎ言葉やちょっとしたひと言を加え、コンテンツの工夫を図りながら指導の積み重ねを図ってきた。この活動は、英語で行うコミュニケーションへの生徒の抵抗感を和らげることと同時に生徒の言語運用能力におけるレスポンス・スピードを上げることもねらいとしている。今年度の小学校との合同授業の実施によって、生徒自身が日頃の学習の成果を実感できることも今後の英語学習への動機づけにつながると考えた。

3.2 発展的な内容の活動例

(1) 札幌中学校における実践



札幌中学校では、第2学年において、英語の運用能力を育成することをねらい、教科書の読み物教材から発展させた内容に関するライティングの授業実践を行った。まとまりのある内容の英文を読んで理解するだけではなく、その内容から言いたいこと、書きたいことが生まれるような授業を展開することで、生徒が学んだ表現を使う機会を得たり、扱った内容をより深く理解したりすることができると思った。

英語の運用能力を育成するためには、ただ「英語を学ぶ」のではなく、「英語を使って何ができ、活動を通して何を学ぶのか」といった CLIL 的活動の視点が重要になる。本実践においては、教科書のリーディング教材の読後の活動として、英語を身に付けたいと思っている物語の登場人物に対して、効果的な英語の学習方法についての自分の考えを手紙で伝える、という学習課題を設定した。これにより、自分の考えを述べる“I think”や、相手に勧めたり促したりする“you should”, “you have to”などの表現、またはより説得力のある表現にするために“because”などを用いて理由や論拠を示すような表現が自然に使用されることをねらった。また、英語の学習方法について学ぶ、という自分自身の現実の問題として捉えることができる点や、そのことが実際に今後の自分の英語学習にも活かすことができる点に価値があったと言える。



(2) 釧路中学校における実践

釧路中学校では、第1年において、既習事項を用いて物語の登場人物（内容）を相手に説明するというスピーキングの授業実践を行った。教科書 Sunshine English Course 1（開隆堂出版）の Program 6 は、三人称単数現在形を理解して、ある人物や物について簡単に説明したり、尋ねたりすることができるようにするだけでなく、短い物語を聞いたり読んだりしたあとに、その物語の登場人物（内容）について絵を見せながら相手に説明したり、自分の思いや考えを表現したりすることができる特性がある。そこで、本単元のまとめとして、外国語活動（Hi, friends! 2）の中で扱われた教材「桃太郎」について、その内容を理解し、物語の登場人物について説明する活動を行った。教材や学習内容を小学校と共通化することで、生徒は小学校の学

習内容を想起しながらスパイラルに学習に取り組むことができ、英語学習へのモチベーションを高めることができると考えた。さらに、ストーリーリテリングという小学校時代にはなかった学習を取り入れることで、生徒が既習事項の定着に向けて、目的意識を明確にもちながら学習活動に参加できるようにするとともに、表現した内容に自分の学びの深まりを実感できるよう工夫した。そして、ストーリーリテリングを行う中で、物語の人物（内容）について自分の考えや感想を述べる場面を設定することで、自分の考えを適切に表現したり、他の発表者の考えを受け入れたりしながら、相互のつながりを意識できるよう配慮した。



【絵を用いた生徒の発表の様子】

(3) 旭川中学校における実践

旭川中学校では、第3学年において、1・2学年で身のまわりの出来事や地球環境の問題について読んだりそれについて簡単な意見を英語で発信したりしてきたことを踏まえ、インターネットや教科書以外のものから地雷問題についての英文を読ませた。話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、また書かれた内容や考え方などを捉えられるよう、英文そのものや教材の提示のしかたを考えるなどして、読み手として主体的に考えたり判断したりしながら理解していけるように指導過程を工夫した。

その結果、地雷問題について自分に何ができるかを考え、どのような活動が行われているかを調べたり将来の夢などと絡めたりしながら自分の意見をまとまりのある文章で話したり書いたりすることができた。

I think it's difficult to remove landmines.
And one person's power is very little. But many people's power
are very big. If we do these things, all over the world
make a difference. I hope many people live in peace.

このように、目的をもって読んだり、読んだ後に感想等を表現し合ったりする活動を計画的・系統的に行わせる上で、地雷問題について4技能を統合するタスクを組むために必要な語彙や表現を帯時間的に活用させたり、自分がテーマについて疑問をもちそれを少しずつ解決していけるような指導を段階的に行っていくことができた。

3.3 他校種との交流の活動例

(1) 函館中学校における実践

函館中学校では、小学校と中学校の円滑な接続を目指すため、中学校1年生と小学校6年生による合同授業を行った。小中合同授業を実施する理由として、①児童生徒の英語学習への意欲が高まり、言語習得の動機づけが明確になると考え、②児童生徒の積極的なコミュニケーション活動を行うことで、互いを尊重する態度が涵養されると予想されるからである。

小学校ではHi, friends! 2の「Lesson 6 “What time do you get up?”～一日の生活を紹介しよう～」を活用し、進学後の自分の生活にかかわる問題を学習の動機と設定して、中学生の生活について実際に中学校を訪問してインタビューを行った。中学校では「New Horizon English Course 1」（東京書籍）「Unit 7 サンフランシスコの学校」ならびに「Multi Plus 2 一日の生活」を活用し、合同授業における小学生とのやりとりを通じて、What time ～?の文と応答を実際に使用したり、自分の一日の生活について先輩としての立場で後輩に紹介したりする場面をまとめとして設定した。

本時では、あくまでも小学生が準備した質問に対し、中学生はその場で即時的に応答することが求められており、また同時に単調になりがちな Q&A にさらにひと言付け加えたり質問を返してみたりというコミュニケーションの工夫も必要となる。このことは 1 年生の CAN-DO リスト「話すこと・発表」の「身近な人や身のまわりのものについて、簡単な英語で話すことができる。」と「話すこと・やりとり」にある「ある話題について、自分の言いたいことを簡単な英語で話したり、質問したりすることができる。」に相当する。

合同授業のねらいでもある言語習得の動機づけとして、英語学習について生徒たちの学習意欲を高めるためには、日常の授業で身につけたことを実際に使用する時間と場面を提供し、生徒自身がその成果と課題を振り返ること（実感や自己評価）が有効であると考え。その点において、小中連携の今後の在り方として、合同授業は継続して進めていきたい取組である。

(2) 旭川中学校における実践

旭川中学校では、第 1 学年の「自己紹介しよう！」という単元において、be 動詞の am / is / are, this / that, 一般動詞の like / play / have などの既習の文構造を使用して自己紹介したり、出身地、趣味や特技、飼っているペットなどについて尋ねたりするなど、英語でやり取りすることができることを目的に実践を行った。

授業の導入では、“What do you want to introduce about yourself?”と発問し、考えを明確にするために、5 人の自己紹介をインプットとして聞かせ、どんな自己紹介をするのか具体的なイメージを抱かせた。その際、インプットに使用した英語は、“Hello. My name is Aleksi Korhonen. I want to be a scientist. I like my country, Finland. And I want to help the Earth. I study science every day. I want to be a scientist. Thank you.”など、生徒が慣れ親しんできた表現を再利用した。この手立ては、生徒にとってどのような内容の自己紹介であるかを理解することを容易にし、有効であった。聞き取らせた内容は、特技、趣味、教科、動物、そして将来の夢の 5 つである。

展開では「自己紹介をし、やり取りを通して相手のことを知ろう。」という課題を提示し、目指す姿を「自己紹介を 4 文以上で行い、質問をしながら 40 秒間会話を継続することができる。」とした。「40 秒」という時間は、準備していた自己紹介をするのに、使用できる文や話すスピードなどを考えて約 15~20 秒、またそれを聞いて即時的に考えながら質問をしたり答えたりする時間を生徒全員に保障するのに、もう 20 秒程度必要であろうということから設定した。現実的なコミュニケーション活動を行わせるために、ICT 機器 (iPad にインストールされているアプリ FaceTime) を使って、初対面の人とやり取りを行わせる場面設定の工夫をし、初対面の人として本学旭川校の英語科 3 年の学生 12 名に協力してもらった。活動の手順は、



- ① 3 分間で自己紹介と関連質問を考え、何度もリハーサルを行う。
- ② 3 人 1 組のグループを作り FaceTime を起動し、はじめに相手の自己紹介を聞いた後、1 人 40 秒間ずつ自己紹介とやり取りを行う。
- ③ iPad を交換し、同じ活動を幾度か繰り返す。

である。実際のやり取りでは、グループでの学び合いや助け合いをしながら、その都度違う学生と 1 人 5 回ずつやり取りを行い、ほぼ全員が自信をもって課題に取り組んでいた。

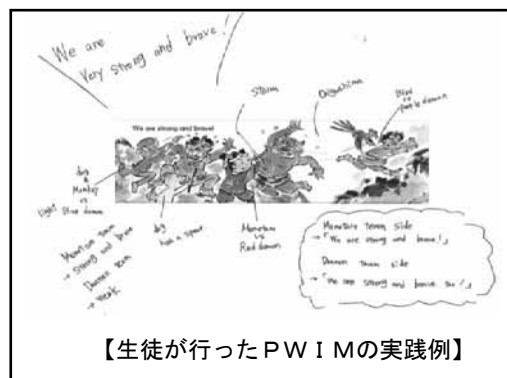
その後の自己評価・相互評価等から判断して、生徒全員が十分満足できるものであった。生徒 1 人 1 人

がクラスメイトの刺激を受けながら、これまで身に付けた資質能力をさらに高めたり、何が言えるのか、あるいは言えなかったのかの理解を深めたりする機会となり、英語を学ぶ意義の認識を高めることができたと考える。また、生徒の実際のやり取りを見ると、中学校としてはこれまで未習であった「将来の夢」「I want to be ～」などを使って自己紹介をしている生徒も多くおり、小学校からの学びの連続性を確認できる実践であった。

4. 取り入れた指導方法・教材・ICT 機器の活用について

4.1 指導方法について

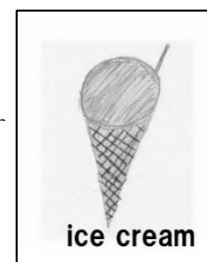
釧路中学校の実践で取り入れた PWIM (The Picture Word Inductive Model) という指導方法は、E.Calhoun (1999) が提唱した学習者の言語発達 (語彙獲得) を促したり、Reading と Writing のつながりを強めたり、コミュニケーションスキルを高めるために使われる手法である。生徒は 1 枚の写真や絵から思いつく単語を書き出し、その単語を使用して、文や物語を作成していくという手法である。右の図は、3. 2 (2) で紹介した「桃太郎」のストーリーリテリングの実践において、生徒が PWIM を用いて、物語のある場面の絵を見て思いつく単語を書き出したものである。グループで語彙や表現を出し合った後、それらの語彙を用いて個人で物語を復元していくという活動を行った。聞いたり読んだりして得た情報だけではなく、視覚的情報からも既習事項の語彙や表現を想起させることができた。



4.2 ICT 機器等の活用について

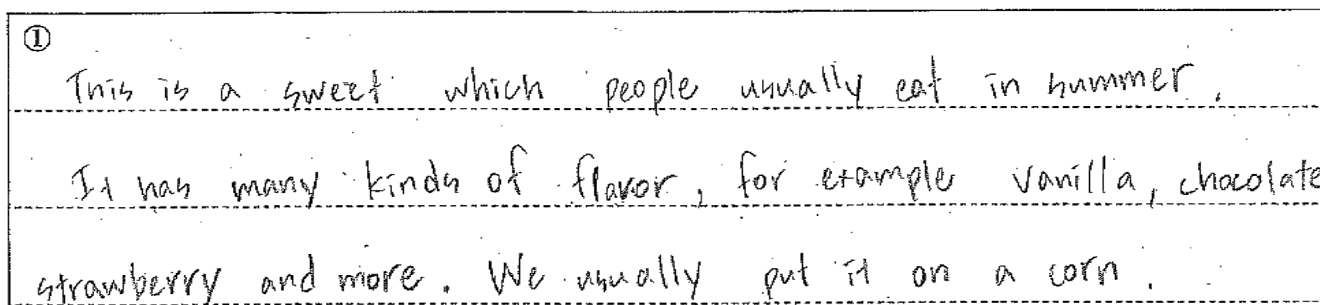
(1) 「わくわくスノーマンプロジェクト」と「どきどき変換チャレンジ」について

「わくわくスノーマンプロジェクト」は、昨年度各地区で按分して、いろいろなトピックの単語や表現を生徒が調べ、文字とともに絵を描いてデータ化した「ピクトフォリオ」である。旭川中学校では、昨年度小学生が作成した画像について、それを説明する文章や、それを話題にしたショートストーリーを作成する取組を行った。iPad でスノーマンプロジェクトの Web ページにアクセスし、そこにアップされている「食べ物」に関する画像から自分の好きなものを選択し、その定義を説明する英文など書かせた。

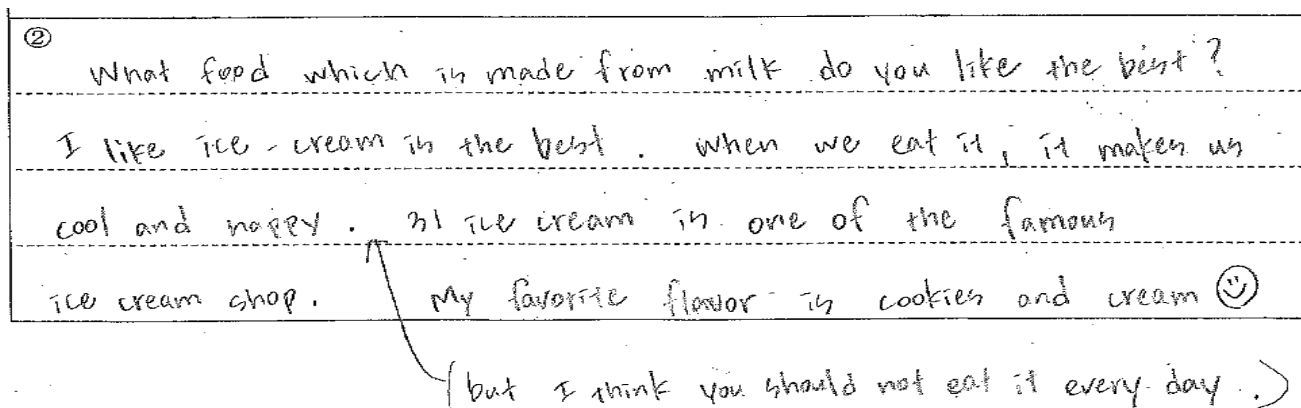


【食べ物に関する単語の一覧と中学生が作成した文章】

apple / cake / carrot / cheese / cherry / corn / crab / deer meat / doughnut / ice cream / macaroon / melon milk / orange / pacific saury / pineapple / salmon / scallop / shishamo smelt / squid / surf smelt / sweet potato / turnip / whale meat / whelk



【「ice cream」を話題にして作成したショートストーリー】



生徒は、小学生の描いた絵を見て、「この絵、上手だね」とか、「英語でサンマって何て言うか知らなかったのに、小学生は知ってるんだ！」などと言いながら作業を進めていた。完成した文章を Web ページにアップすれば、この文章を用いて単語をクイズにすることができる。また、例えば、釧路の児童生徒が自分の住んでいる地域について英語で紹介しようとして、「scallop」という単語を用いたときに、相手が理解できなくても「言い換え」するための練習にもなる。ただ、現在アップされている食べ物の単語やフレーズについて、小学校で作成しているカリキュラムや、中学校のスパイラルタイムで扱う内容と連動しているわけではないので、さらに研究を進めていく必要がある。

「どきどき変換チャレンジ」は、iPad の音声認識変換アプリである「Siri」を授業で活用し、発音の精度を高めるための取組である。旭川中学校では、1年生の発音クリニックとして5月下旬に実施した。ペアで約20台のiPadを使用し単語レベルの変換チェックを行ったが、変換エラーが多数出て、ストレスがたまる結果となってしまった。一方、授業後の生徒感想では、「発音をよくしたい」という動機付けがほぼ全生徒高まったことは前回(25年度)と同様の結果となった。このあと、iPadを3~4台使用し「Siri」に世界の主な国の時間と天気をたずねて情報を収集する学習活動を行う予定である。

(2) タブレット端末を使用した授業

函館中学校では、1学年から3学年まで生徒ひとりに1台ずつ小型端末(以下タブレット)が貸与されている。また、校内ネットワークサーバーが設置されており、生徒-教師間での電子ファイルの交換も可能となっている。その利点を大いに生かし、英語の授業における

【ファイル交換用の校内専用WEBページ】

生徒のスピーチなどの様子をタブレットで撮影し録画した動画はネットワークを通じて専用サーバーに提出できることが可能となっている。教師はそれを見ながら生徒一人一人の評価がいつでもでき、また、記録された動画を生徒と一緒に見ながらフィードバックすることに役立てることも可能である。動画はサーバーに蓄積されているので、生徒たちは自分の過去のパフォーマンスについて時間をさかのぼって振り返ることもでき、自身の成長を実感できることは大きなメリットでもある。教師側から提供したいピクチャーカードなどの視覚教材は従来、紙媒体もしくはプレゼンテーション用ソフトを使用し、プロジェクターにてスクリーンに映しだしていたが、このシステムが使用できると、生徒全員に一度にデジタル媒体として提供することもできる。

学年	先生	Upload	表示
全校	全学年の生徒を対象		
1年団	朝倉先生		
	平石先生		
	伊藤先生		
	高橋進矢先生		
	林先生		
	森先生		

3.3 (1) で述べた合同授業では、小学生が中学校を訪問し、中学生の一日の生活の様子についてインタ

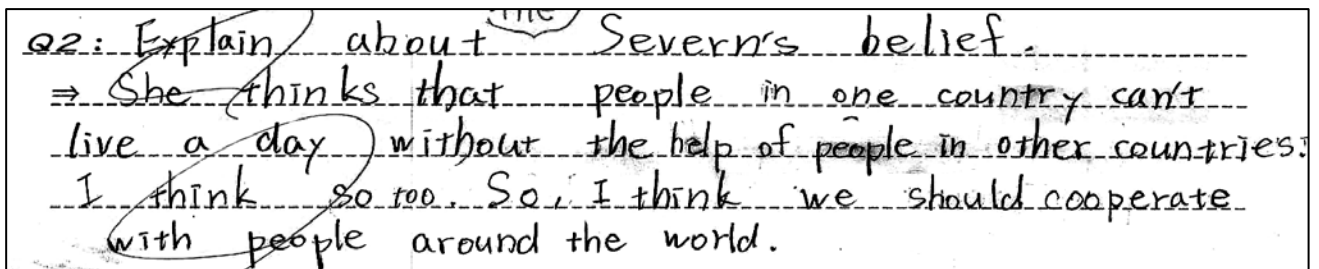
ビューしながら、その生活の実態を把握することがねらいであった。したがって、中学生は実際に朝起きてから家に帰宅して寝るまでの生活を撮影し、タブレットを大型テレビに接続して映像を見せながら英語で Show & Tell を行いながら説明した。小学生はその映像を見たあとにそれぞれ知りたいと思っている具体的な質問をし、それを中学生が答えるという Q&A をそれぞれのグループごとに行った。それぞれのグループごとにブースを設置し、スタンプラリー方式で小学生が移動しながら対話を繰り返していった。

事前の指導では、中学生はグループごとに映像を準備し発表原稿を作成する。前時のリハーサルでは、それらの映像を実際に学級内で見せながら発表の練習をした。感想や改善などの意見を学級全体で交流し、本番の小学生との授業に向けて準備を進めた。

5. 実施による効果（生徒・教師・保護者への効果）

札幌中学校では、実践を続ける中で、生徒の振り返りから、「自分の力で意見を相手に伝えることができた。」「他の会話でも英語を諦めないで使うことができた。」という声があがっている。また、内容重視の、意見や考えの表現を中心とした授業を継続してきたことで、表現したいことと表現できることの距離が縮まってきたことや、普段は聞くことのなかった仲間の深い考えや鋭い意見に驚いたり、心動かされたりする様子が見られる。さらに、習得した表現をスパイラルに活用するなど、既知の表現で言いたいことを表そうとする意欲やそのための技能が高まってきている。これは、内容重視の表現活動や相手とのつながりを意識した考えや意見のやりとりがある授業を実践してきたことにより、本校で目指している英語の運用能力が向上した結果と捉え、スパイラルタイムの大きな成果と考えている。

【教科書の内容について自分の考えを加えて表現】



函館中学校では、今回の授業を通して、生徒たち 71 名が授業を通してどのように実感したかアンケートを実施した結果、表 1 のようになった。

表 1 函館中学校のアンケート結果

(4…よくあてはまる 3…ほぼあてはまる 2…あまりあてはまらない 1…全くあてはまらない)

質問内容	4	3	2	1
1. 普段よりも積極的にコミュニケーションを図ることができた。	58	9	4	0
2. 小学生の質問に英語で答えることができてうれしいと思った。	51	8	11	1
3. 授業を終えて、さらに英語を学びたいという気持ちになった。	62	6	2	1

以上の結果を考察すると、日常の学習の成果を実感できることが英語学習への動機づけにつながることをわかる。身につけた表現を想起しながら進めるスパイラル的学習の成果を発揮できる場面を設定するこ

とで、学習者の意欲の高まりを効果的に導きだせることが小中連携の中でも見とることができた。

釧路中学校では、今年度4月と10月に英語の学習に関するアンケートを実施した。次ページの表2は、その結果からの第1学年における抜粋である。質問項目「今まで関係ないと思っていたことも、こんなつながりがあるかと初めて知った」では、10月の調査で86.9%の生徒が学習のつながりを感じている。これは、実践を通じて、小学校での英語の内容を想起させる活動に取り組んできた結果、小学校の学びが中学校の英語の学習内容についてつながっていることを意識するようになった結果である。質問項目「どうすればよいかということだけでなく、どうしたら間違いになるかという理由も分かった」では、4月から10月で14.5%の増加が見られた。

ここから小学校での「聞くこと」、「話すこと」を中心とした英語に慣れ親しむ活動から、中学校で「読むこと」、「書くこと」を加えた活動を通して、英語の正確さと適切さを意識し始めている生徒が多くなったことが分かる。また、質問項目「学習した内容をこれから身のまわりの生活や社会でつかってみようと思った」では10.7%の増加が見られ、学習したことを実際に使ってみることに意欲を持っている生徒が多くなったことが伺える。

表2 英語の学習に関するアンケート結果からの抜粋（実施数：103人4段階評価 4月と10月に実施）

質問項目 (4:よくあてはまる 3:ややあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない)	肯定的回答 (%)	
	4月	10月
今まで関係ないと思っていたことも、こんなつながりがあるかと初めて知った。	78.6	86.9
どうすればよいかということだけでなく、どうしたら間違いになるかという理由も分かった。	82.5	97.0
学習した内容をこれから身のまわりの生活や社会でつかってみようと思った。	88.3	97.0

これらの結果から、スパイラルタイムを取り入れ、小学校英語科での学習を活かしつつ、小中の学習のつながりをスパイラルに意識させながら、自己表現ができる内容のあるコミュニケーション活動を単元構成にくみこむことで、英語を使うことに自信を持てる生徒の育成につながっていると考える。

旭川中学校では、中学1年生を対象に4月末に実施した「児童英検 GOLD の結果を昨年度のデータと比較したところ、表3・表4の通り、すべての分野でその正答率が上昇しており、小学校英語の成果の伸びを確認することができた。

表3 平成25年度の分野別正答率 (GOLD)

	語句	会話	文章	文字
附属旭川中1年	68	67	69	78
全 国	74	70	74	77

表4 平成26年度の分野別正答率 (GOLD)

	語句	会話	文章	文字
附属旭川中1年	72	70	73	82
市 全 体	65	63	65	71

これを基に、6月中旬の授業において、聞くこと・話すことの定着を促すため、1年生において自己紹介とやり取りを含め40秒間原稿なしで行えることを実証した。ただし、発音や文法、綴りの定着に向けてはより丁寧に行うことの必要性を実感している。また、書くことおよび文法については、基本的な書き方や文法が7月中旬に113名中8名が未定着（文の書き換え、語形変化、語順整序にて確認）。ただし、英作文としては、「自己紹介カード」作成の課題で、ほぼ全員が、量的に10文程度、自分の持ち物紹介が

5 文程度書くことができるようになった。

6. 実施上の問題点と今後の課題

現在、小学校英語科において、学習指導要領相当の資料やカリキュラムの策定、授業計画づくりが進んでいる。これにより、小学校卒業段階でどんな力をどの程度定着させたいのかを CAN-DO リストの形で示すことができると考える。したがって、中学校において作成している CAN-DO リストは、それによって変更していくが必要になる。また、CAN-DO リストのディスクリプタが、実際の授業や生徒の変容などを踏まえたときに、どれだけ妥当性をもっているかを検証していかなければならない。加えて、英語によるプレゼンテーション力について、例えば発表姿勢や意欲・表現においてどのような力が付いているかを調査するのに、どのようなデータを示せばよいかの検討も必要である。

次に、ICT 機器の活用についてである。「中中連携」にかかわって、7月初旬、附属札幌中学校の2年生と附属旭川中学校の1年生が iPad のアプリ「FaceTime」による自己紹介でのやりとりを実施した。ネット環境が悪く、思うような学習成果を得ることができなかった。しかし、学習後の振り返りでは、ほぼ 100% の生徒がこのような学習をまたやってみたいと評価していた。したがって、少なくともクラスで 20 台（2人に 1 台）がスムーズに動くネット環境になることで多大なる学習効果が期待できるものと考えている。現状のシステムでは思ったことをやるのがなかなか難しく、ネット環境や ICT 機器の整備・充実が一層求められる。

次年度研究では、小学校で学習してきた文字や文法事項等を踏まえた習得状況を的確に把握し、内容的に深化させたカリキュラムと言語の運用能力をどこまで高めていくのか CAN-DO リストの再検討を進めていく。さらに、ICT を積極的に活用した授業と小中、小中、中中連携の授業実践を積み重ね、その成果をカリキュラムの中に位置付けていくことが肝要であると考えている。

参考・引用文献

- E.Calhoun(1999), Teaching Beginning Reading and Writing with the Picture Word Inductive Model
萬谷隆一 直山木綿子 卯城祐司 石塚博規 中村香恵子 中村典生 編著 (2011)『小中連携 Q&A
と実践』開隆堂
- 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版
- 文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版

資料1 「スパイラルタイム」オリエンテーションの CAN-DO リスト

【聞くこと】

- 1□ 基本的な英語の音声の特徴をとらえて、正しく聞くことができる。
- 2□ 自然な口調で話されたり読まれたりする簡単な英語を聞いて、情報を聞き取ることができる。
- 3□ 相手のできることを聞き取ることができる。
- 4□ 道案内の英語を聞いて、場所にたどり着くことができる。
- 5□ 相手が行きたい場所について聞き取ることができる。
- 6□ 友達の将来の夢について理解することができる。
- 7□ 友達の一日について聞き取ることができる。

【話すこと】

- 8□ 基本的な音声の特徴をとらえて、正しく発音することができる。
- 9□ 自分のできることを表現したり、相手のできることをたずねたりすることができる。
- 10□ 相手に道順を聞いたり、道案内したりすることができる。
- 11□ 自分が行きたい国を述べたり、相手の行きたい場所について質問したりすることができる。
- 12□ 自分の一日について表現したり、相手の一日を英語で質問したりすることができる。
- 13□ 自分の将来の夢について話すことができる。

【読むこと】

- 14□ 日常生活の身近な英語を理解することができる。
- 15□ 日常生活の身近なことをあらかず簡単な文を理解することができる。

【書くこと】

- 16□ アルファベットを活字体で書くことができる。
- 17□ アルファベットの大文字や小文字、符号を適切に使うことができる。
- 18□ 自分の名前を英語で書くことができる。

1年生

【聞くこと】
<input type="checkbox"/> ゆっくり話されれば、身近な話題について話された内容を聞いて、理解することができる。 (自己紹介, 第三者についての紹介など, ゆっくり話される条件下で)
<input type="checkbox"/> 日常生活に必要な情報を聞いて、概要を理解することができる。 (ニュース, 天気予報, 道案内など)
<input type="checkbox"/> 簡単な内容の英文を聞いて、概要を理解することができる。 (短い物語文や外国の文化や習慣, 簡単な説明文など)
【読むこと】
<input type="checkbox"/> 日常生活の身近な話題について書かれた短い英語の文を読んで、概要を理解することができる。 (自己紹介, 第三者についての紹介, 簡単な会話文や日記, メール文など)
<input type="checkbox"/> 意見文などを読んで、書き手の伝えたいことについてその概要を理解することができる。 (友だちの書いた文章, 短いエッセイ)
<input type="checkbox"/> 短い話について、大まかなあらすじを読み取ることができる。 (短編の物語, どんなことが書かれていたか)
【話すこと・発表】
<input type="checkbox"/> 身近な人や身のまわりのものについて、簡単な英語で話すことができる。 (自己紹介, 第三者についての紹介, スピーチ)
<input type="checkbox"/> 聞いたり読んだりしたことについて、感想を簡単な英語で話すことができる。 (友だちが話したり書いたりした簡単な文章, 短いエッセイやメール文など)
【話すこと・やり取り】
<input type="checkbox"/> 日常生活における身近な場面で、簡単な英語を用いて自分の言いたいことを伝えることができる。 (電話, 道案内, ファストフード店での買い物の場面など)
<input type="checkbox"/> ある話題について、自分の言いたいことを簡単な英語で話したり、質問したりすることができる。 (簡単な質問・やりとり, ある場面についてごく簡単に説明するなど)
【書くこと】
<input type="checkbox"/> 身近なことについて、簡単な英語を使って文章を書くことができる。 (自己紹介, 第三者についての紹介など)
<input type="checkbox"/> 聞いたり読んだりしたことについて、簡単な英語で感想を書くことができる。 (ごく簡単なニュースなどを聞いたり, 友だちの作文を読んだりして)
<input type="checkbox"/> 目的に応じて、簡単な英語を用いて英文を書くことができる。 (簡単な手紙やメール, バースデーカード, メッセージカードなど)

2年生

【聞くこと】

- 身近な話題について話されたり読まれたりした英語を聞いて、その要点を聞き取ることができる。**
(行事や旅行、将来の夢、学校や家庭におけるきまりなど)
- 特定の場面で話された英語を聞いて、必要な情報を聞き取ることができる。**
(ニュース、天気予報、道案内、駅でのアナウンスなど)
- ある程度まとまりのある内容の英文を聞いて、その内容を理解することができる。**
(歴史上の人物、日本や世界の観光地についての情報など)

【読むこと】

- 日常生活における身近な話題について書かれた英語の文章を読み、詳細を理解することができる。**
(紀行文、会話文、説明文など)
- 手紙やメッセージなどを読んで、書き手の意向などを理解することができる。**
(書き手の意向に応じることができるよう内容をとらえる)
- 簡単な物語などを読んで、話の展開を読み取ることができる。**
(歴史上の人物、比較級を使った説明文など、「はじめは、次に、最後に・・・」と時系列で説明)

【話すこと・発表】

- 身近な話題について、自分の考えや理由を加えて話すことができる。**
(過去に行った場所やこれから行く旅行の計画、将来の夢についてのスピーチなど)
- 聞いたり読んだりしたことについて、その概要を話したり、感想を述べたりすることができる。**
(友だちが話した内容や説明文について)

【話すこと・やり取り】

- 日常生活における身近な場面で、簡単な英語で質問したり応答したりすることができる。**
(電話でのやりとり、より複雑な道案内、食事や買い物の場面など)
- ある話題について、ゆっくりと読まれたり話されたりした短い英文を聞いてメモをとり、それを基に内容の概略を説明することができる。**
(メモを基にした即興的な説明)

【書くこと】

- 身近な話題について、自分の考えや意見、理由などを加えてある程度まとまりのある文章を書くことができる。**
(行事の説明、旅行の計画、将来の夢など)
- 短編の物語などを読んだり、友だちと話したりした内容について、自分の考えや感想などを簡単な英語で書くことができる。**
(聞いたり読んだりしたことを基にした活動、簡単な英語で)
- 目的に応じて、英語を用いて英文を書くことができる。**
(意見文、招待状や私的な手紙、メッセージなど)

3年生

【聞くこと】

- なじみの薄い話題について話された内容を聞いて、その要点を聞き取ることができる。**
(文化遺産、観光名所、平和・環境問題、さまざまな国の文化や食事、他の教科の内容)
- 特定の場面におけるまとまりのある内容の英文を聞き、必要な情報を聞き取ることができる。**
(ニュースやインタビュー、駅や空港でのアナウンス、買い物や食事の場面)
- あるテーマについて話された英語を聞いて、話し手の意向などを理解することができる。**
(意見が分かれるテーマについて、賛成・反対の意見とその理由)

【読むこと】

- 身近な話題について書かれた英語を初見で読んで、事実や書き手の意向などを理解することができる。**
(新聞記事、ニュース)
- あるテーマについて書かれたまとまりのある文章を読んで、その要点を理解することができる。**
(文化遺産、観光名所、平和・環境問題、さまざまな国の文化や食事、他の教科についてなどについてかかれた解説文)
- ある程度の長さの物語を初見で読んで、主題を読み取ることができる。**
(物語文、初見、辞書などの活用、登場人物の行動や話の流れなど)

【話すこと・発表】

- あるテーマについて、事実や特徴を説明したり、自分の考えなどを話したりすることができる。**
(文化遺産、観光名所、平和・環境問題、さまざまな国の文化や食事、他の教科で学んだことなどについて、例示しながら説明したりスピーチしたりする)
- ある程度の長さの英文を聞いたり読んだりしたあと、その内容を説明したり、感想を述べたりすることができる。**
(ニュースや新聞記事、物語や説明文、ストーリーテリング、感想を述べる)

【話すこと・やり取り】

- 日常生活における身近な場面で、英語を用いて適切にやりとりをすることができる。**
(レストラン、電話、道案内などの場面、要望するなど言語の機能を生かして、理解したことを確認しながら即興的に会話を継続する、ある場面を見て実況中継をするなど)
- 与えられたテーマについて、賛成・反対の意見とその理由などを述べたり問答したりすることができる。**
(ディベートやディスカッションによるやりとり)

【書くこと】

- まとまりのある英文を読んだり聞いたりしたあと、その内容を要約したり、自分の考えなどを書いたりすることができる。**
(文化遺産・観光名所、平和・環境問題、さまざまな国の文化や食事、他の教科で学んだ内容、ニュースや新聞記事、物語や説明文、あらすじをまとめる、感想を書く)
- 意見の分かれるテーマについて発表したりやり取りしたりした内容について、最終的な自分の考えや意見をまとまりのある文章で書くことができる。**
(ディベート、ディスカッションなどで深まった内容について書く、理由・根拠・例示を用いて)
- 目的に応じて、適切な英語を用いて、まとまりのある文章を正しく書くことができる。**
(意見文、日記など、辞書などの活用)